

マリンワールドでウミガメの調査・研究を担当し、子どもたちにも自然環境の大切さを伝えている「ウミガメ」の伝道師とも言える宮地勝美さんに、ウミガメのお話を伺いました。

本当に分からぬいとしか 言えぬいとしかばかりなんです

生まれているウミガメを観ることが
できるのは、水族館や研究施設

生まれているウミガメを観るに
なりたい場合はマリンワールドにお越し
ください。

ウミガメは動物園や水族館のよ
うな研究施設でないと飼えません。
ワシントン条約に日本が加盟して野
生動物保護法が施行されました。そ
れ以前から飼っている施設もありま
すが、ウミガメは全種類飼育しては
いけません。マリンワールドのウミ
ガメは近海で打ち上がったもので、
保護しながら皆さんに見てもらえる
ように、展示しています。

その姿には意味がある

動物の体の形には、全部意味があ
ります。逆にいえば意味がない物が

去年まではたくさん産卵に来てい
たが今年はずり減った場合、減って
いるかと思いがちです。しかし、産卵
にはその年の気候など、いろんな要
素が関係しているのです。ある地域の
産卵に来たカメの数で、世界中のカ
メの増減は語れないんです。
それと現在のカメの全体数が分
かっていない。漂着死体が増えた、産
卵に来るカメが減ったということだ
けで全体数が減ったと断言すること
はできない。カメの全体数が分かっ
ていれば、減ったかどうか分かって
きますが、世界中のカメの数が減っ
ているかどうかは誰も調べていない
んです。だからこそ調査研究してい
る人がいるんですね。

無くなっている。例えば私たちがい
ま見ている生物の姿は、あくまでも
地球上の歴史の中で通過点に過ぎ
ない。私たち人間もそうです。

生命は常に進化しています。そ
して、自分たちの環境に適した体にな
っていきのが動物です。それを進
化と言います。だから今私たちが見
ている生き物の姿は、あくまでも通
過点であると同時にその姿は、生命
が環境に合わせて最高に進化した形
態なんです。それが今後どう形が
変わっていくのかは、未来にしか分
からない。だからその最高の形に
なった生物を観察しながら、いろい
ろ考えて、夢膨らませていただけれ
ば面白いと思います。もちろん大き
いとか、かっこいいとかという見方
でも十分だと思いますが、もっと別
の見方もあるということを知ってい
ていただきたいです。
もし水族館に来たら、カメの頭か

むしろ今、目の前にある命を助け
る。目の前の命(卵)を守るとい
う形の保護は大切だと思います。孵
つた卵が、何十年後に親になって帰
ってくるのかどうか、福津のかたがた
も調査をしていらっしやいます。次
に会うのが数十年後ということであ
れば、なかなか成果が認められない
調査でもあるんです。また、子ガメ
が大人になって帰ってくる確率とい
うのはものすごく低いものがありま
すね。

現状を把握するために、皆さんに
できることもあります。たとえば海
岸を散歩していて、ウミガメの死体
を見つけたら、うみがめ課に連絡す
るとか、研究している人に連絡する

ら尻尾までよく観察してみてください
い。動物の体は、どうしてそういう
姿になっているのか、考えたり、調べ
たりしてもらえたらと思います。

海にはいろんな生物がいる中で、
海の中で生活しているハ虫類はウミ
ヘビとウミガメだけです。これらの
ハ虫類はとも興味深く進化してい
ますよ。

何年生きるのかわからない

何年生きるか証明されていない
です。水族館で飼育すると早熟とな
るのは知られています。4.5センチ
の物が1メートルになるのだから、
成熟するまでに数十年。でも何年生
きるのかはまだ分かっていません。
陸ガメは100年以上生きていた
という記録はあるが、海ガメはまだ
分かりません。そのために子ガメに、
マイクロチップを埋めて放流する活

とか、そういう連絡でも研究の精度
は上がります。

母浜へ帰るのかわからない

カメが浜に戻って来るのは産卵の
ために上陸するメスだけです。カメ
がオスカメスになる分かれ目は、砂
浜の温度なんです。最初に染色体が
できる期間が何日間かあって、その
間の温度が29度以上であればメス、
29度以下であればオスになります。

日本海は世界中のアカウミガメの
産卵地の北限なんです。北というこ
とは、寒いということ。そして
日本海で生まれるカメは、オスの供
給源ではないかとも思われています。
もしそうならば、母浜へ帰るとは
言えないんじゃないでしょうか。カ
メが必ず生まれた浜に帰って来るか
ということ、現在のところ分かっ
ていません。

一方で、同じ巣穴の中の卵でも上
と下では、温度が違います。例えば
暑い夏は上が暑い。でも寒い夏は地
熱の影響で下の方が温かい。産卵巣
の長さは母ガメの足の長さで決ま
ります。産卵巣の上と下では温度が
違うとなるとオスカメス均等に生ま
れるかもしれない。世界中の海でオス
とメスがバランスよく生まれるよう
になっっているという説もあります。

動も実施されていますね。
20年後30年後に産卵に戻ってきた
ら、その時初めて何年くらいで大人
になるかということが分かることにな
ります。そういうことは、まだ始
まったばかりなので、実証されるの
には時間が掛かります。

でもカメの寿命が何十年単位であ
ることは間違いないと思いますよ。
10年20年30年掛けてゆっくり大人に
成長していく動物であると思いま
すが、今はウミガメの寿命を証明する
材料がないと聞いています。個人的
にも恥ずかしながら、分からないと
答えさせてもらいます。

減っているのかわからない

ウミガメが増えているのか、減って
いるのかというのは、なかなか言い
づらいのが本音です。

もしそうなら、卵を砂浜から掘り
出して、人間が育てましょうとい
うことをするとオスカメスのバラン
スを人間が崩してしまうことにもなり
かねない。だから現在、卵の移植は
止めましょうという声も挙がって
います。

さっきも言ったように、そこにあ
る命を守るという行為はとても大切
なこと。しかし、その命を守る
行為が、野生動物のバランスを崩す
行為になっていくこともあります。
人間が手を加えてもいいのか。この
ことはよく考えないといけない。今
ここにある命を守るという考え方も
すごく大切なことです。その2つの考
えのバランスは本当に難しいですね。
母浜へ帰るについては、分からない
としか言いようがありません。福津
産のアカウミガメが成長して戻っ
てきた証拠は今のところ見つかり
ません。

カメは生まれた時、栄養袋をお腹
にくっ付けています。それが無くなる
ころには、狩りをしなければいけ
ないんです。でも海には外敵がいっぱ
いいます。外敵から姿を隠しながら餌
を食べることが出来る場所に辿り
着かなければ生きていけない。それ
がどこかという太平洋の黒潮だ
と思われれます。鹿児島や宮崎・四
国の浜からだ太平洋の黒潮は泳げば

Katsumi Miyaji
マリンワールド魚類課技師
宮地 勝美さん





うみがめを守る人たち

現在、市内でウミガメを守る3つのボランティア団体あり、地道な調査を続けている団体や海岸清掃に重点を置いている団体が活動しています。それぞれの思いを語っていただきました。

勝浦うみがめ塾



地道な調査・保護活動を続けています。ウミガメの上陸産卵調査や孵化などの調査、スタンディング調査、勝浦海岸清掃などの環境保全活動、研修会・他関連団体との交流会および先進地視察などを行っています。

スタンディング調査とは、カメの死骸などが打ち上がったと連絡があった場合、市のうみがめ課の職員に同行して計測などのさまざまな調査を行います。アカウミガメだとタグが付いているかもしませんので、タグが付いているかの確認をします。産卵があった場合は、波がかぶらない場所に移植する必要があります。人間が出来るのは移植することだけです。大潮の満潮時に波がかぶらない場所だと移植する必要はないのですが、ここらは満潮時は冠水してしまいます。だから移植せざるを得ない。移植しても90%はかえっていません。人間が手を掛けられるのはそれだけでしょね。移植しなくていい場所だったら、移植する必要もないけれども、そういう場所は無いんです。

また産卵シーズンは海水浴シーズンと重なるから、巣穴は60センチ下であっても、人間の体重がかかれば卵はつぶれちゃう。だから、人が来ない場所に移植する必要がありますよ。

恋の浦ウミガメの会



恋の浦海岸はすごくきれいになりましたよ。ごみを捨てる人が少なくなりました。私たちが定期的に海岸清掃をすることで、そこに遊びに来る人たちが見て、ごみを捨てていなくなります。私たちは月に1回1時間くらい清掃をやってます。海岸清掃をしていなかった頃は、夏場はひどかった。空き缶やごみをみんな捨てて行くんですね。流れ着いたごみじゃなくて、遊びに来た人が捨てていくごみがものすごかったんです。冬場は風の影響で、漂着物がすごく多い。夏は風が吹かないから、流れ着いて来るごみは少ないです。

朝、海岸清掃をして、仕事に行ってもその日は全然きつくないんですよ。自然からの癒やしというのは、絶対あるんだなって感じます。ストレス社会と言われてますが、誰かのために、何かのためにやっているというのが、心を広くするんじゃないか。そういう心が広がった感じが仕事の時も一日中続くんですよ。とても不思議なんです。そこにある植物とか風とか光から、何かすてきな力をもたらしているんですよ。ぜひ、皆さんも恋の浦にふらっと来ていただいて、海の風を感じていただけたらと思います。海岸清掃に興味のあるかたは、気軽にいらしてください。

ウミガメ特捜隊



6月～8月は夜11時に集まって、1時間くらい海岸を歩きます。現在は2人以上集まらないと見回りは行かないことにしています。真夜中を歩くので安全を優先させています。もともと温かいところのアカウミガメが、津屋崎の浜に産卵に来るのは、いまだに謎なんです。はぐれて迷ったカメが来ているんじゃないかという説もあるけど、人によってはあえてここを選んでいるという人もいます。そういうことを調べることは大切です。

福津市には美しい砂浜があり、美しい松もあります。日本全国見てもなかなかありませんよ。私は郷づくりの環境部会に入っているんですが、毎月松林を清掃しています。松林が9割くらいは雑木林になっているんです。それで3年前くらいから風を通すことを始めました。広葉樹の葉が落ちたままだと腐葉土になります。そうなる松が枯れてしまうんですね。

もっと深刻なのは里山ですよ。竹が密集して倒れあって生えている。昔からの原生林が竹に囲まれて、日当たりが悪くなっています。何か対策をとらないと、原生林が無くなってしまわないか。多くの人に、今ここに宝物に気付いてほしいですね。

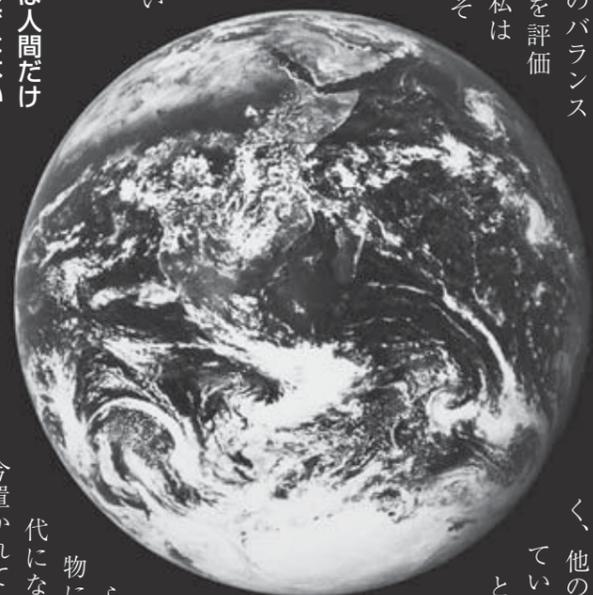
でも今やらないと、今後はやれないかもしれない、だから調査しているんですね。日本が裕福な時代にはできない。これが5年後10年後日本がどうなっているかわかりませんから。こういった動物に目を掛けよう。

調べるためには親ガメに発信器を付けたら、子ガメにマイクロチップを埋め込んだら、そういう活動をやり続けたいと分かります。20年後、30年後に何か結果が出るかもしれない。ただ確率を考えると、夢物語ですよ。

すぐですが、福岡や長崎、鳥取で生まれたカメはどうやって行くんだろ。そう考えると、ものすごい試練が待っています。かなり屈強なカメしか生き残れないでしょう。福津や岡垣に産卵に来ているウミガメは何らかの理由があって産卵に来ているのではないか。ただ対馬暖流は北上しているから、太平洋に出る可能性はかなり低いと思います。子ガメは潮の流れに逆らって泳げるほど遊泳力は無いと思うし、ほとんど死んでしまうのではないかと。だけど、生存率がかなり低いにも関わらず母ガメがわざわざ福津まで産卵に来ているのは何か理由があるんじゃないか。そういうことを調査しているかたがたがいっぱいいます。



地球は人間だけのものではない



私たちが住んでいる地球は人間だけのものではない。人間の生活は、他の動物の生存に影響を与えています。でも例えば、アリという昆虫がいるからといって、下ばかり向いて避けて歩くわけにはいきませ

られる余裕のある今だからこそ、やり続けなければいけない調査だとは思いますが。福津市はウミガメだけではなく、野生動物に関心のあるかたが多いです。浜の貴重な植物やカブトガニを調べているかたがいらつて、海全体のバランスというものを評価すべきだと私は思います。そして、福津の海だけにどまらず、世界中の海で、みんな環境を考えられるようになってほしいです。

今置かれている現状をもう一度みんなで、振り返る時期に来ています。「勝浦」とか「恋の浦」とか、とても自然環境が良いのですから、その環境を守るために、今、私たちに何が出来るとかということを、みんなが考えていくことが大事じゃないか。今置かれている現状をもう一度みんなで、振り返る時期に来ています。「勝浦」とか「恋の浦」とか、とても自然環境が良いのですから、その環境を守るために、今、私たちに何が出来るとかということを、みんなが考えていくことが大事じゃないか。

アマモ

アマモは群生して、草原のような群落を作り「アマモ場」と呼ばれています。アマモ場は消波の機能を果たし、魚介類の産卵に適した環境を作り出すと共に、稚魚やエビ類などの生息の場となります。ここから干潟の「ゆりかご」とも呼ばれ、漁業関係者にもありがたい植物です。



カスミサンショウウオ

西日本に分布する10cmくらいの小型のサンショウウオです。

丘陵地の湧水や水田のある場所を好み、夜行性で昼間は木の葉や石の下に隠れて休んでいます。市内でも確認されているが、全国的に開発による生息地の破壊や水質汚染などにより生息数は激減しています。



ヤマトシマドジョウ

九州、壱岐、山口県の一部にのみ生息するシマドジョウの仲間です。私たちがよく知っているドジョウは水田や水路にすんでいます。ヤマトシマドジョウは河川に適応した魚です。エサを食べるときは、水底にいる小動物を砂ごと吸い込み、砂だけをエラから吐き出します。



ハマボウ

内湾や河口などの海岸(塩性湿地)に生息し、防潮林の役目も果たします。花期は7~8月で、同属の黄色いハイビスカスに似た花から和性ハイビスカスとも言われています。多くの府県で絶滅危惧種に指定されています。市内でも、ハマボウを守るための「津屋崎ハマボウの会」や「干潟みまもり隊」が保護活動を行っています。



クロツラヘラサギ

特徴は、その名のとおりヘラのような形をしたくちばしと黒い顔が特徴の大型の水鳥です。餌を捕るときは、平たくくちばしを左右に振る独特の方法で、小魚やエビなどを食べています。

今年の調査では、世界全体で1,848羽(うち日本は270羽)が確認されました。1993年にこの調査が始まって以来、最大の減少値となりました。津屋崎干潟を中心に毎年5羽程度が越冬のためにやって来ます。

私たちの隣の小さな住人たち

私たちと同じ福津に住む(生息する)「小さな住人たち」がいます。今、この住人の住むところが狭くなって、苦しんでいます。

人間は進化の過程で知脳を発達させ、生息域を広げました。しかしその結果、他の生命たちを絶滅に追い込み、さらに自分たちの住む環境をも破壊しています。

地球の環境はこのままでいいのか、自分の住む地域から見つめてみませんか？

私たちの隣に住んでいる「小さな命たち」を紹介します。



カヤネズミ

世界で最も小さいネズミの1種で、重さは8グラムほどしかありません。小さな動物ですが、1日に体重の3分の1から4分の1に相当するエサを食べます。カヤネズミは草地、河川敷や水田、麦畑に生息し、植物の葉を編んで球状の巣を作ります。飼育下では3年ほど生きますが、野生下での寿命は半年ほどです。

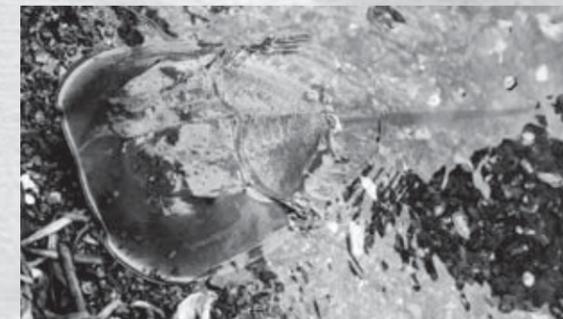


ニッポンバラタナゴ

日本固有の魚で、オスはバラの花のような美しい体色をしています。この魚はドブガイという二枚貝に産卵するという珍しい習性をもっています。以前は琵琶湖以西の平野部に広く生息していましたが、現在では大阪府や香川県、九州の一部など限られた場所にしか生息しておらず、絶滅が心配されています。

カブトガニ

約2億年前のジュラ紀からほとんど形が変わらない「生きて化石」の1つです。日本では瀬戸内海沿岸部と九州北部の内湾部に生息しています。一度つがいになったものは特別なことがない限り離れないと言われており、カブトガニ類が生息する中国やインドネシアなどではたいへん夫婦仲のよい動物として親しまれています。



メダカ

日本人にとって身近な生き物の1つで、童謡などにも歌われて親しまれてきた魚です。自然分布は北海道を除く日本全土で、各地に5,000語のぼに上る方言があると言われていています。背ビレとしりビレの形で雌雄を区別することができます。淡水魚の仲間ですが高塩分に強く、海水中でも繁殖することができます。

